

自由を守るための条件

社会的診断：いずれ自由が輝くために



品川心療内科自由メモ

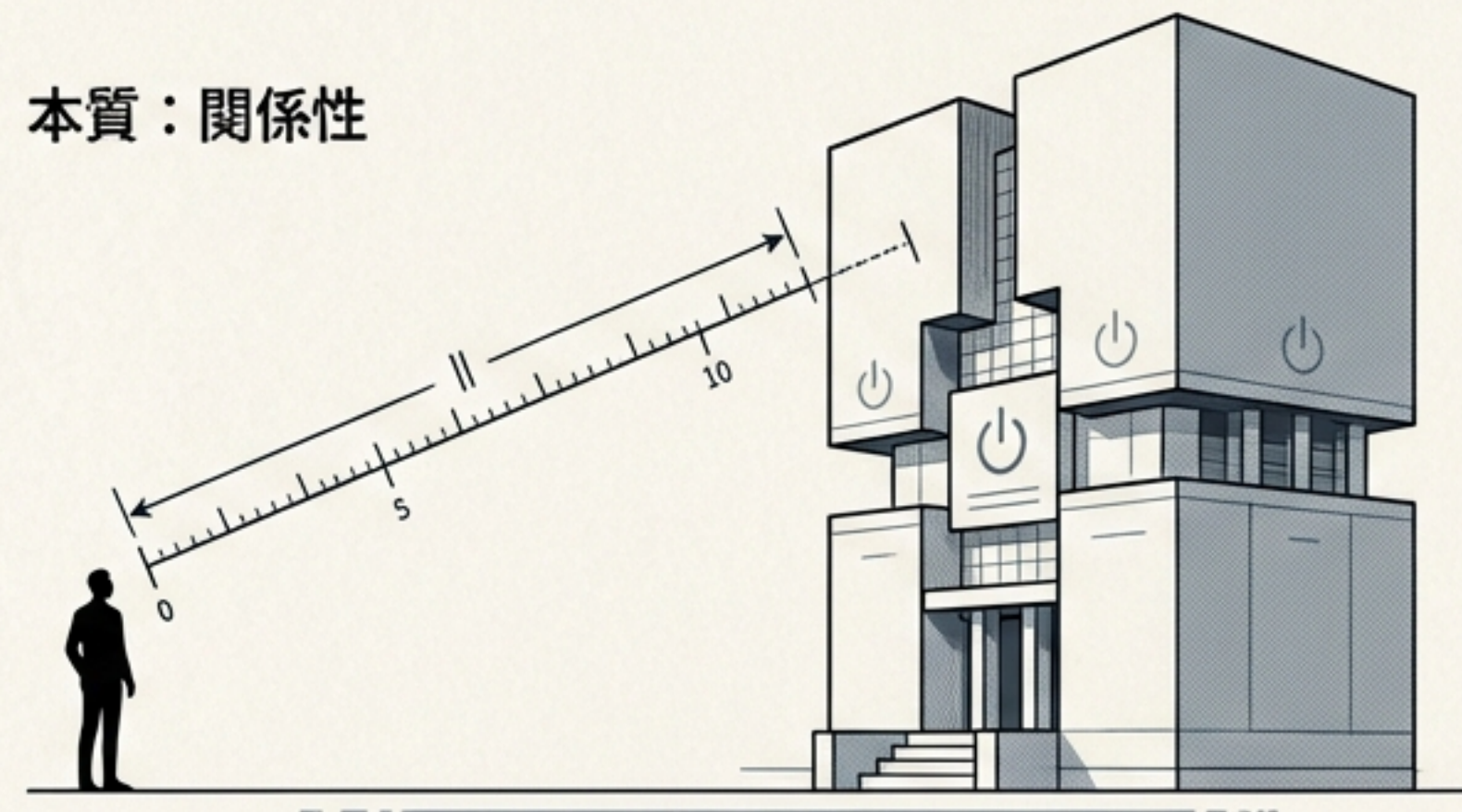


表層：技術論

本質は安全保障の技術論ではない

改憲論争の表層では「軍事・情報の対米自立」が議論されるが、これに容易な結論は出ない。真に問われているのは「国家観」と「人間観」である。

本質：関係性

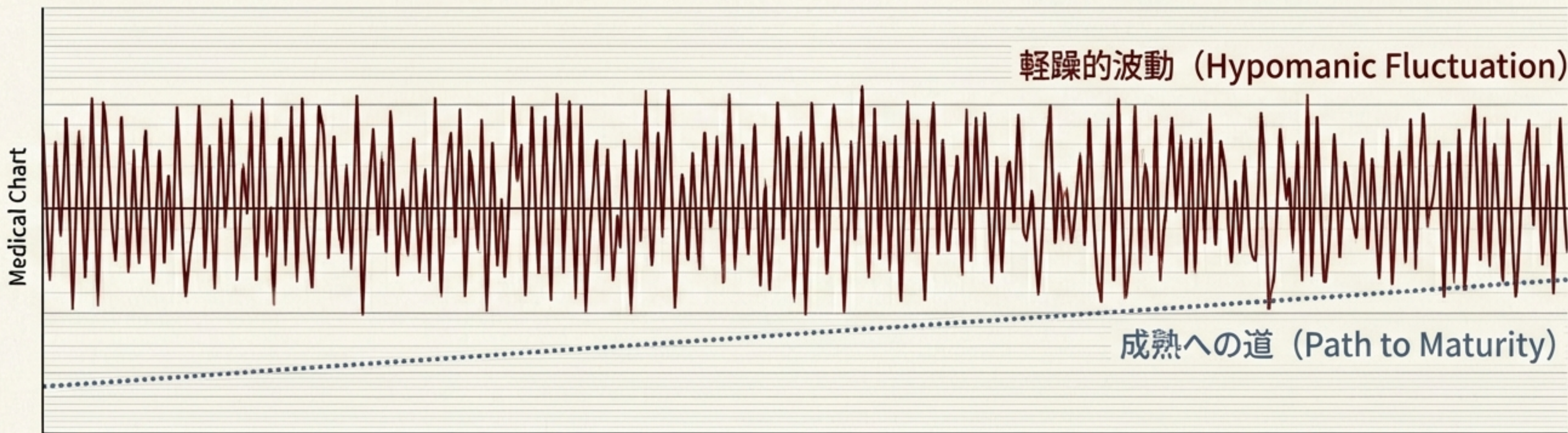


問い：

- ・ 市民は国家にどこまで従う存在か？
- ・ 国家は市民をどこまで統合する存在か？

日本社会の診断：「うつ」ではなく「軽躁」状態

長期停滞の中で、社会は沈黙するのではなく、軽躁的波動を示している。



強い言葉への嗜好

調整型政治を退屈とし、
断定的な物言いを好む。

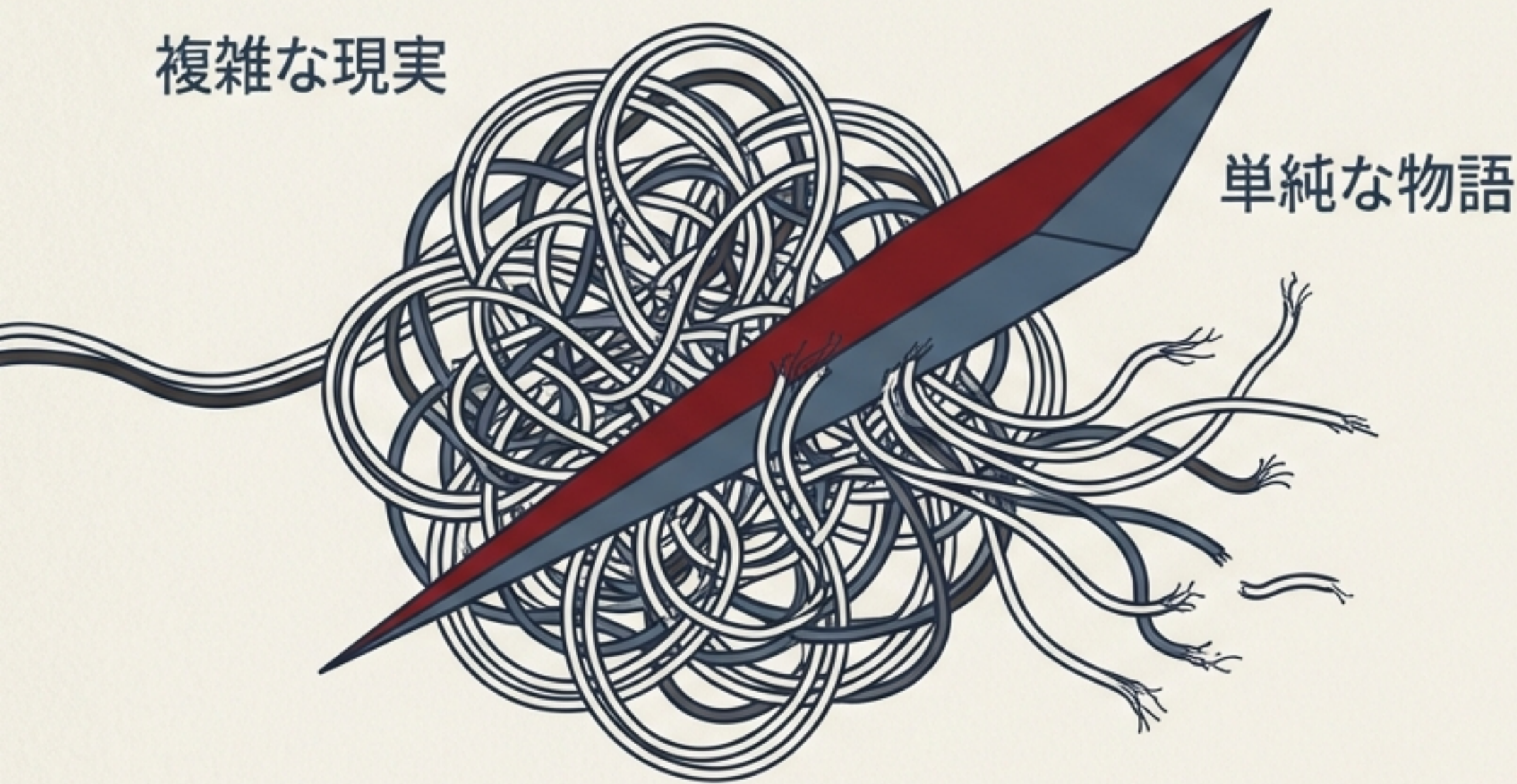
周期的な高揚

一時的な熱狂はあるが、
本質的課題は先送りされる。

成熟の欠如

社会が揺れ続け、
成熟しきらない。

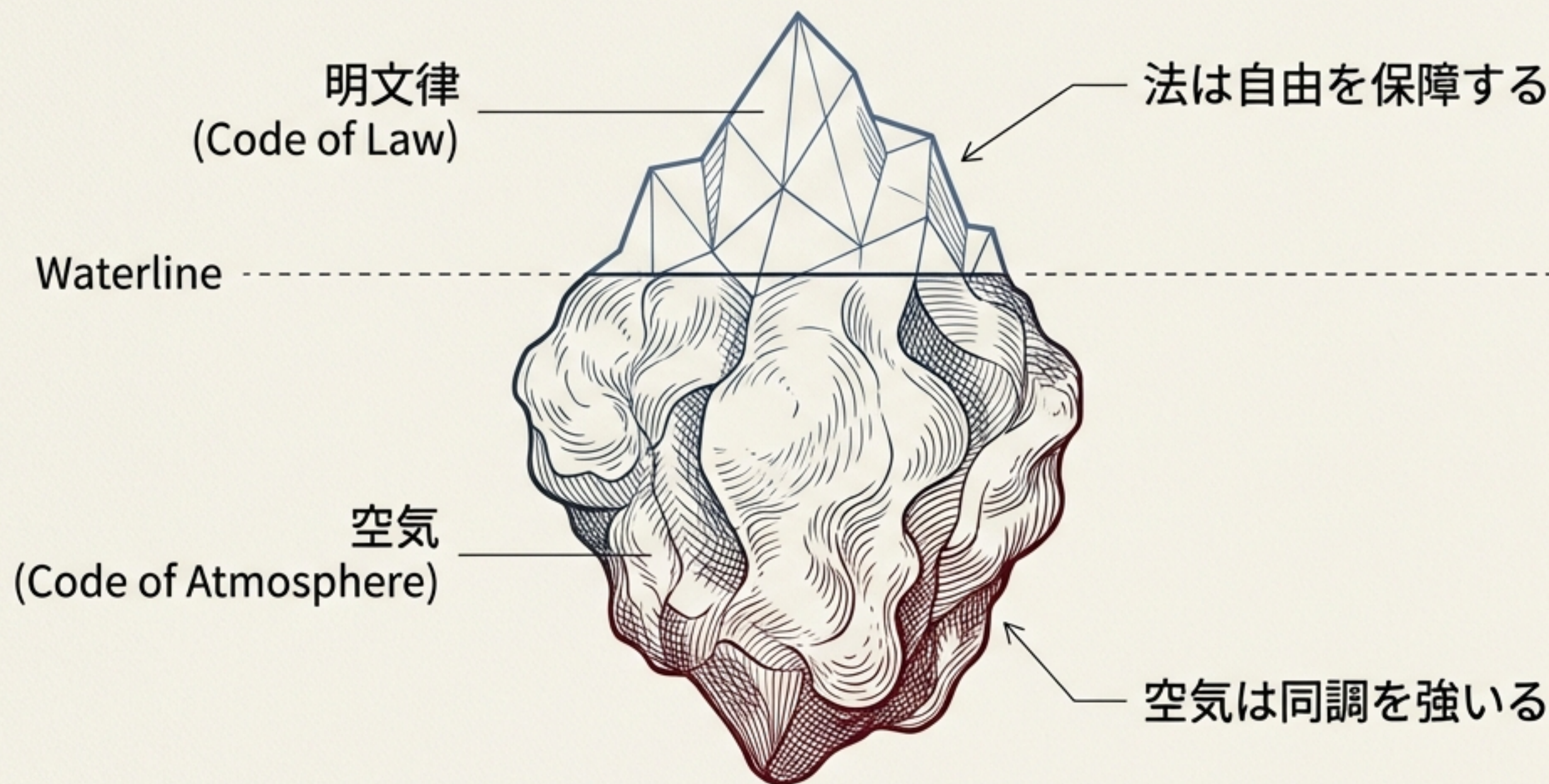
不安は世界を単純化し、思考を停止させる



- 社会的危機や経済的不安は、「分散」より「集中」を、「多様性」より「単純化」を選ばせる。
- SNS環境は「短い言葉」と「敵味方の構図」を優遇し、熟議を衰退させる。

不安な心理は、複雑な現実よりも「強いリーダー像」や「分かりやすい物語」に安らぎを求める。

日本社会の二重構造：法と空気

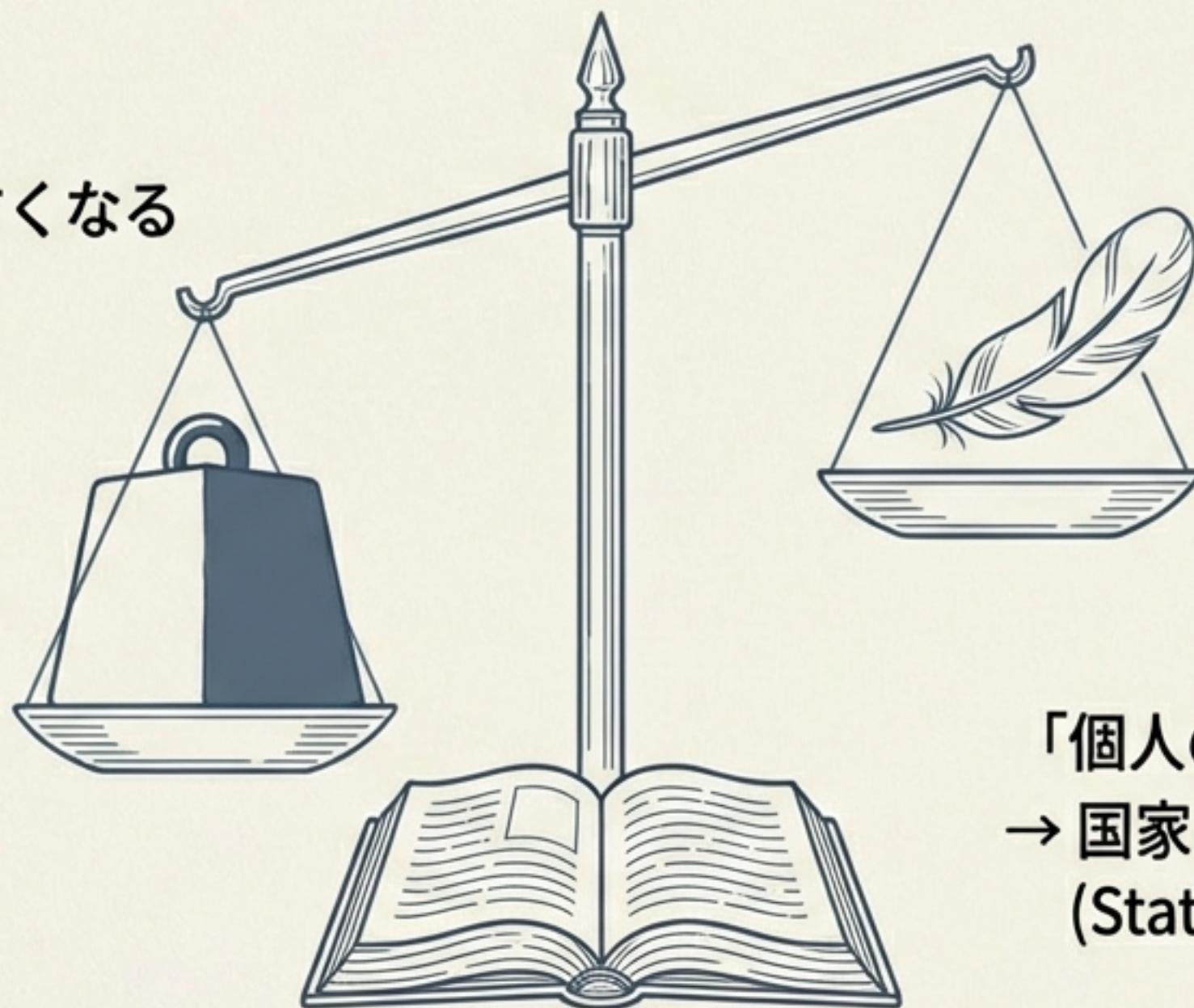


日本には明文化されない「空気」という秩序が併存する。法的に自由であっても、「逆らえば排除される」という予感が内面化されると、自由は形式だけのものとなる。

言葉の配置で、権力の重心は移動する

「公共の秩序」を掲げる
→ 国家は自由を制限しやすくなる
(State > Individual)

公共の秩序



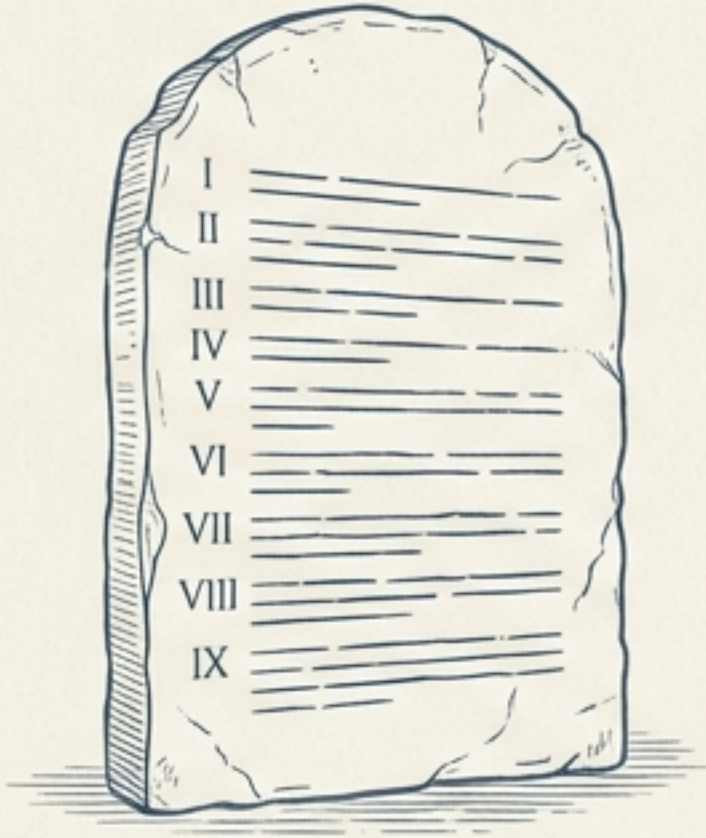
個人の尊厳

「個人の尊厳」を最高価値とする
→ 国家は個人を守るために存在する
(State < Individual)

条文の書き換えは単なる修正ではなく、市民と国家の関係性のリセットである。

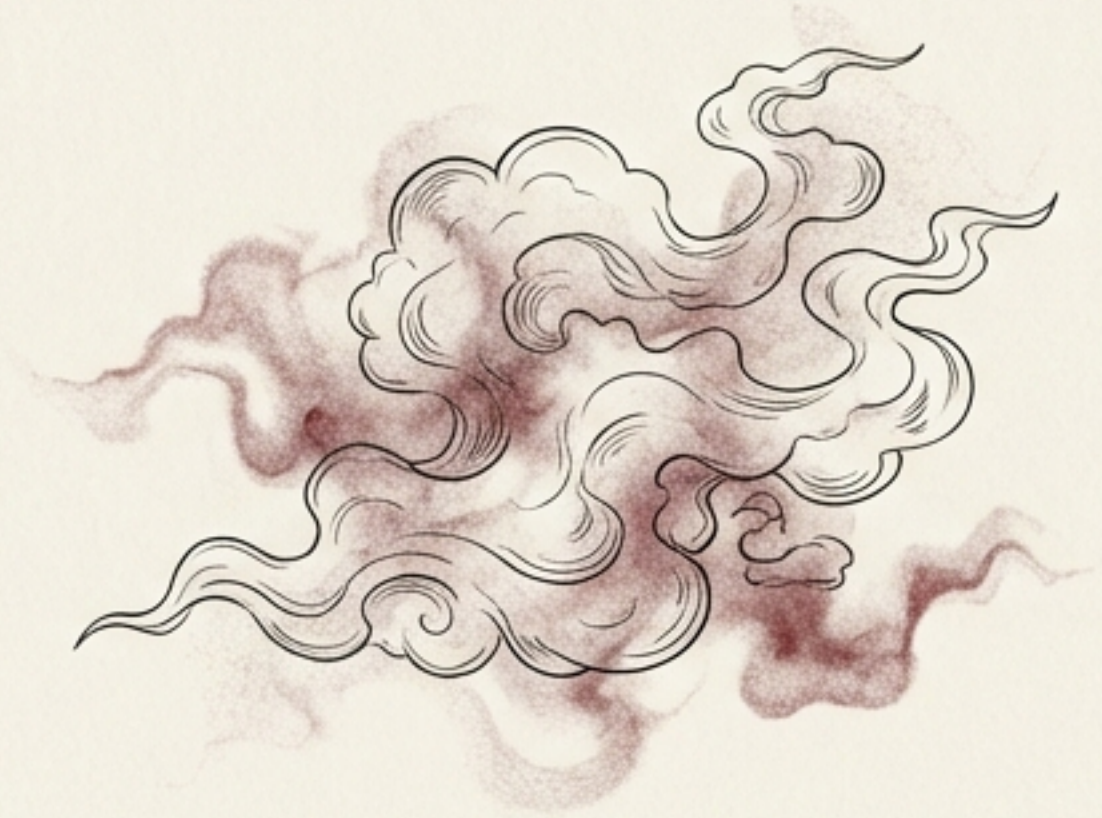
「父性」の不在と、内面化された「空気」

西欧：法的父性



闘争を通じて確立された明示的な権威。

日本：空気の優位



法ではなく、内面化された曖昧な権威。

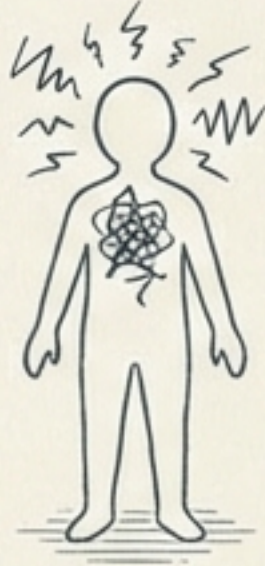
権威が曖昧なまま内面化されるため、抵抗すべき対象が見えにくい。

未成熟な主体は、国家と同一化する

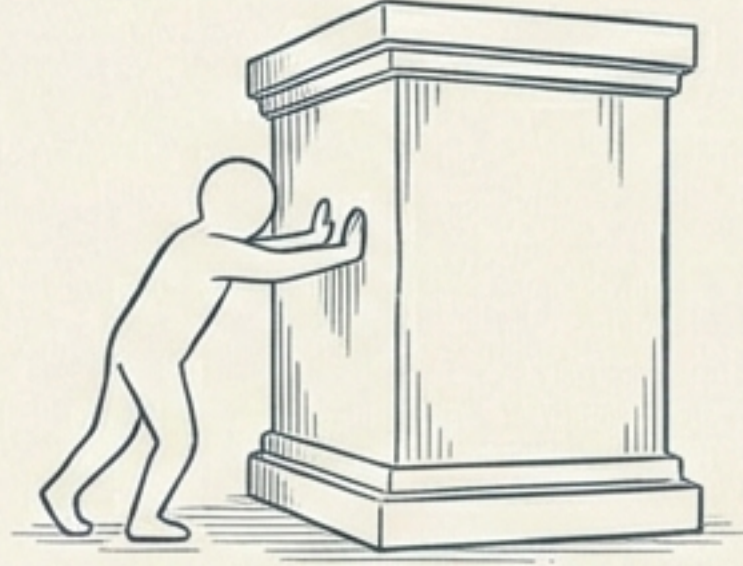
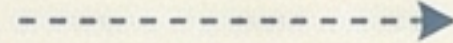
1. 個人の自律が未確立

2. 強い象徴（国家）への依存

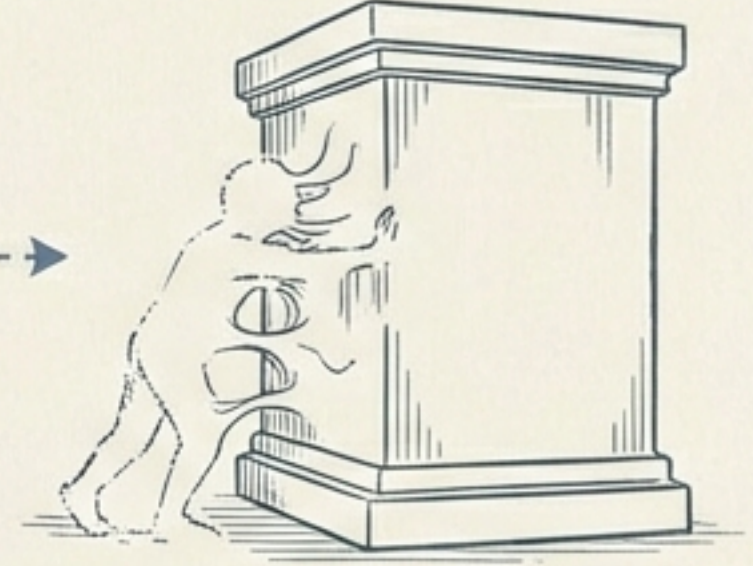
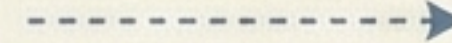
3. 国家批判 = 自己否定



Anxiety/不安



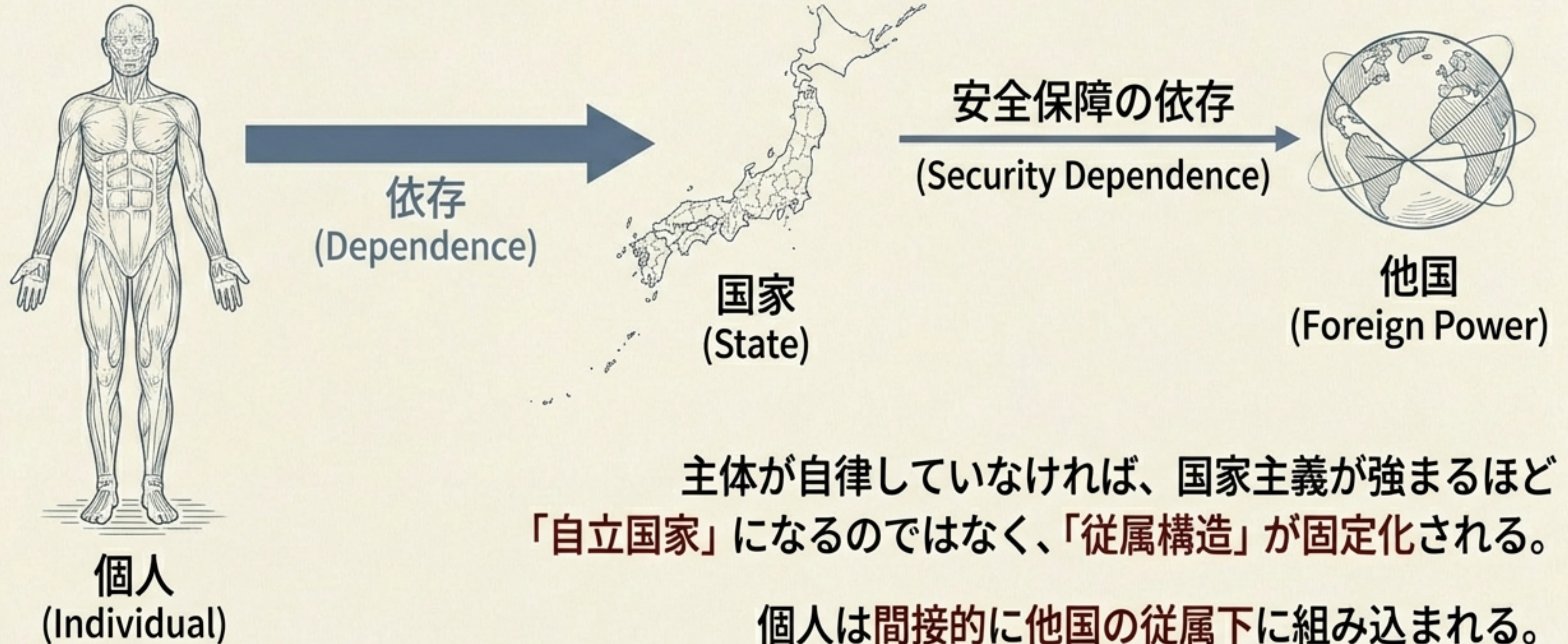
Dependence/依存



Identification/同一化

国家が倫理の源泉となり、不同意は「非国民的」とみなされる。
外からの統制よりも、この内面化された統制の方が深く作用する。

国家主義と従属のパラドックス



自由の核心は「不同意の自由」にある

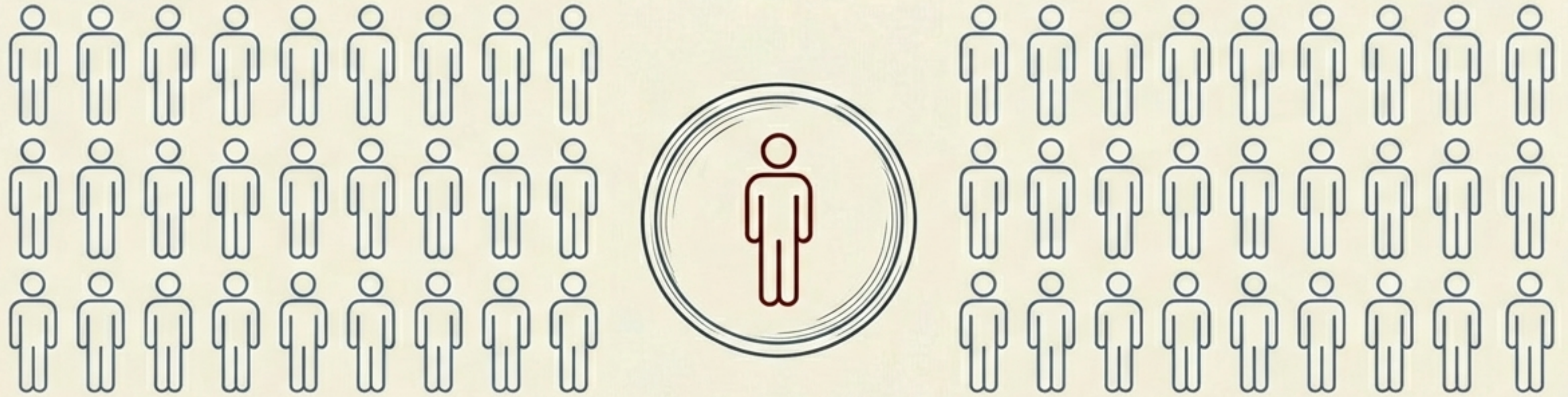
自由とは、
単に好きなことを
する権利ではない。

不同意

- 批判する自由
- 拒否する自由
- 沈黙する自由
- 無関心でいる自由

思想・良心・表現の自由は、「国家と一致しない権利」を守るためにある。

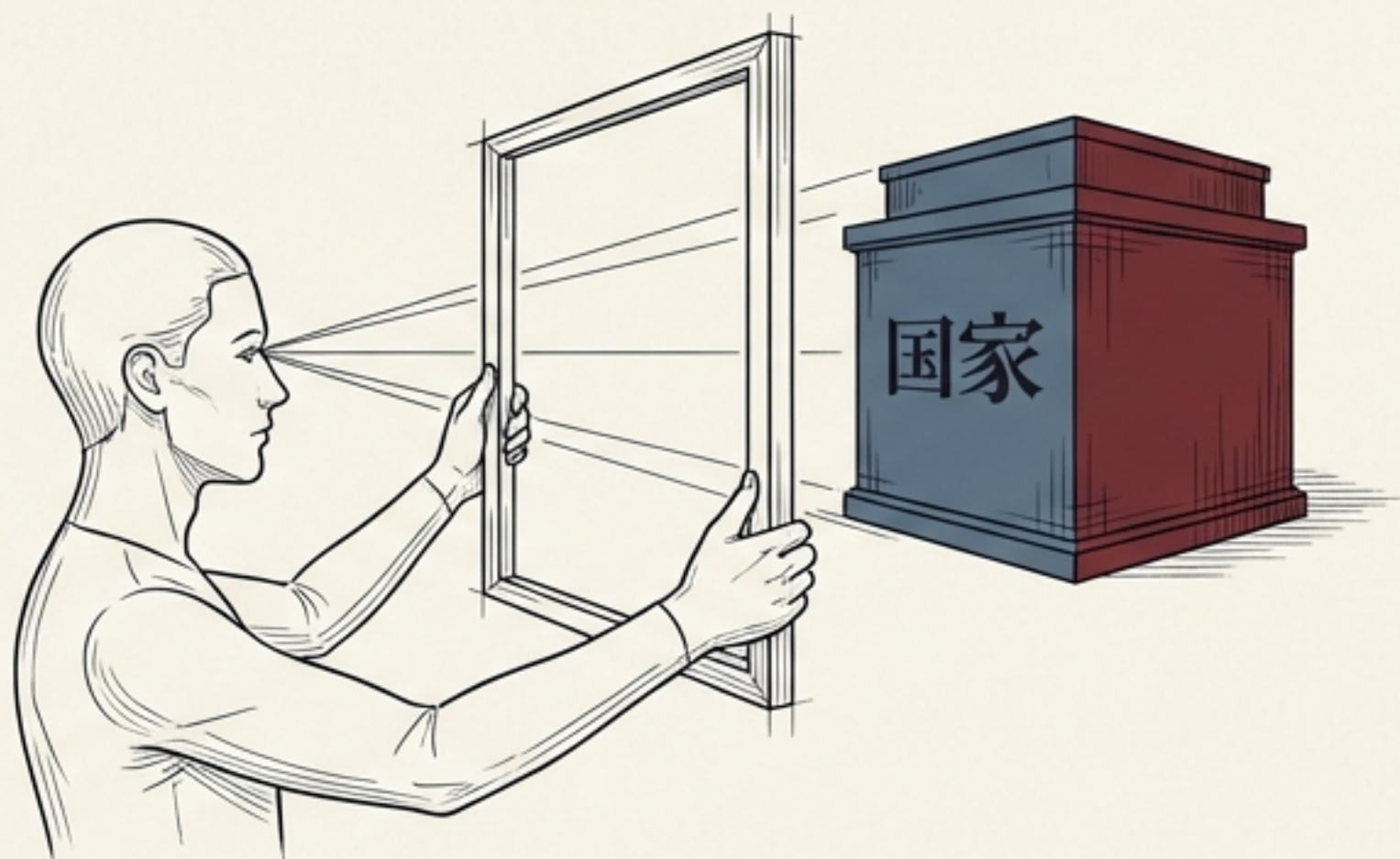
民主主義の成熟度を測るリトマス試験紙



**社会の健全さは、賛成者の数ではなく、
「不同意者が安心して存在できるか」で測られる。**

全員が同じ方向を向く社会は、団結しているのではなく、病んでいる可能性がある。
異論が許容される空間こそが、真の公共空間である。

自由の条件：国家を相対化できる主体の確立



最も危険なのは国家そのものではなく、
「国家と同一化しなければ不安になる心理」
である。

国家への「不同意の自由」が守られるときのみ、
健全な公共は成立する。
法が残っても、この心理的条件が崩れれば、
自由は痩せていく。

いずれ自由が輝くために

自由とは、同調圧力（空気）に抗い、所属しない不安に耐える強さのことかもしれない。
我々がその不安を引き受け、自律した主体であり続けるとき、初めて自由は実質的な輝きを持つ。

